

多くの人が持っていて、私を持っていないというものはかなりあるだろう。しかし、ほとんどの人が持っているのに私を持っていないというのはそういうくつものないはずだ。

考えてみると、思いつくのはたったひとつである。

それは財布だ。

私は財布を持っていないのだ。

金というものの付き合いにおいて、私にとくべつ変わったところがあるとは思えない。もちろん、こういうことは、あまり人と比較する機会がないものだから、ひよつとしたら自分だけが気がついていない「変わったところ」があるかもしれない。しかし、まあ、特に浪費癖があるわけでもないし、とてつもない吝嗇家というわけでもない。

だが、ひとつだけ、私が他人といくらか違っている点があるとしたら、財布を持っていないということかもしれない。しかも、いままたま持っていないというのでなく、ずっと昔の、子供のときから、およそ財布というものを持つたことがないのだ。

札入れも小銭入れも、およそ金の入れ物としての財布を持つたことがない。だから、いつも、所持金は服のポケットに



絵・江口修平

出入り

沢木耕太郎

入れておくことになる。多くの場合、使われるのはジーンズの尻のポケットで、そこに何枚かの札が突っ込まれている。

それがなくなれば所持金はなくなつたということなので、家に帰るとそこにまた何枚かの札を補充しておくことになる。

あるとき、そのことを笑い話のように話すと、私から見るとけっこうヤクザな知人が、まじめな顔をして言ったものだった。

「そんなふうにして人生を渡っていけると思っちゃいけない」

彼によれば、金というのは、きちんと扱ってあげないと、さっさと出て行ってしまうものなのだという。

「それは女と同じだよ」

しかし、この年齢まで、ついに財布を持たず、札を尻のポケットに突っ込むという人生を送りつづけることになった。この先、財布を必要とする生活が待っているとは思えないから、私は死ぬまで財布と無縁の人生を送ることになるだろう。

確かに、ヤクザな知人の言うとおり札の出入りは激しかったが、女の出入りはそれほどでもなかったから、財布なしの我が人生も、まずは「平穏な人生」ということになるのだろう。

さわき・こうたろう●ノンフィクション作家。1947年東京生まれ。徹底した取材と文献渉猟によって編み出す清新なノンフィクション・スタイルを確立したこと等により2003年菊池寛賞受賞。2006年には『凍』で講談社ノンフィクション賞受賞。近著に『旅する力―深夜特急ノート』。

